HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	間接的要求の理解における文脈の効果
Author(s)	仲, 真紀子; 無藤, 隆
Citation	教育心理学研究, 31(3), 195-202
Issue Date	1983-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44498
Rights	日本教育心理学会
Type	journal article
File Information	naka-002.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Japanese Association of Educational Psychology

195 Jap. J. of Educ. Psychol, VOL. XXXI, No. 3 (1983)

間接的要求の理解における文脈の効果*

仲　真紀子** 無藤　隆***

一般に，間接的要求（例：「時間を教えていただけますか」，「時間を知りたいのですが」）の理解には文脈が重要な役割を果たす（Clark, 1979；Gibbs, 1980；Levinson, 1979；仲，無藤，藤谷，1982）。例えばGibbs (1980) は，要求が為される状況説明文が間接的要求の理解を促進することを，またClark (1979)，仲ら (1982) は，話し手の目標や計画に関する先行情報が間接的要求の理解しやすさを左右することを報告している。

しかし，どのような文脈的情報が間接的要求の理解にとって重要なのかを，理論的，実験的に検討している研究はない。本研究の目的は，Searle (1975) の枠組を発展させて日本語の間接的要求の理解に重要と思われる文脈的情報を同定し，その働きを調べることである。

Searle (1975) は間接的要求が成立する前提条件として，(a)準備条件 (preparatory condition：要求の聞き手（受け手）Hは，ある行動Aをすることが可能である)，(b)誠実性条件 (sincerity condition：要求の話し手Sは，HがAをしてくれることを望む)，(c)命題内容条件 (propositional content condition：SはHがしてくれるであろうAを述べる)，(d)理由 (reason：協力，義務等，HがAをする理由）等を挙げた。彼によれば，話し手は，これらの事柄のどれかに言及することにより（例えば(a)について「・・・できますか」）間接的要求を行うことができる (c. f. Brown, 1980)。

このことを聞き手の立場から考えると，聞き手は要求が成立するための条件の一部についての発話（間接的要求）を聞き，その条件および他の条件が成立していることをチェックし，要求を理解していることになる。もしそうならば，これらの条件に関する情報が明示的に与えられている方が，そうでない場合よりも，要求の理解（推測）は容易であろう。つまり，これらの条件に関する情報は，間接的要求の理解において重要な文脈的情報であると考えられる。

本研究では，まず日本語の間接的要求で言及されることの多い事柄を予備的に調査し，そこから間接的要求が成立するための前提条件を推測する。そしてそれらの条件に関する明示的な情報――理論的に重要と考えられる文脈的情報――が間接的要求の理解にどのような影響を与えるかを問題にする。

間接的要求を適切に理解するには，その発話が「要求」であること（発話の発語内の力）と，その要求の「内容」とを理解することが必要と考えられる (Gatzdar, 1980)。そこで文脈的情報が，間接的要求のこれらの側面の理解にどのように関わっているのかを，それぞれ実験1，2で調べる。実験1では，どのような文脈的情報が先行して与えられた時，間接的要求と直接的要求の発語内の力が等しいとされる率が高くなるかを調べる。また実験2では，ある要求に関する文脈的情報を次々と呈示し，その要求の内容を推測させることにより，どのような情報が与えられた時，内容がよりよく推測されるかを調べる。

予備調査

間接的要求の理解に重要と考えられる文脈的情報を同定するために，設定された状況においてどのような間接的表現が用いられるか(表現において何が言及されるか)を調査する。

方　法

被験者　大学生41人。

材料　大学生を要求の話し手，大学生が日常よく出会う人々（店員，同年代の他人，友人等）を要求の聞き手として設定し，要求がなされる状況説明文を作成する（例：「学生食堂です。佐々木君は昼食をとるため，お盆をもって席に着きました。ソースをかけようとしたのですが，ソースは左斜め前で食事をしている女の人の向こう側に置いてあります。そこで佐々木君は，その女の人に……。」）。状況説明文は22文作成し，ランダムに2組に分けて調査票A，調査票Bとする。

* 本研究は昭和57年度文部省科学研究費補助金（特定研究(1)研究課題番号57115004「言語の標準化」）によるものである。

** お茶の水女子大学人間文化研究科
*** 聖心女子大学文学部

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

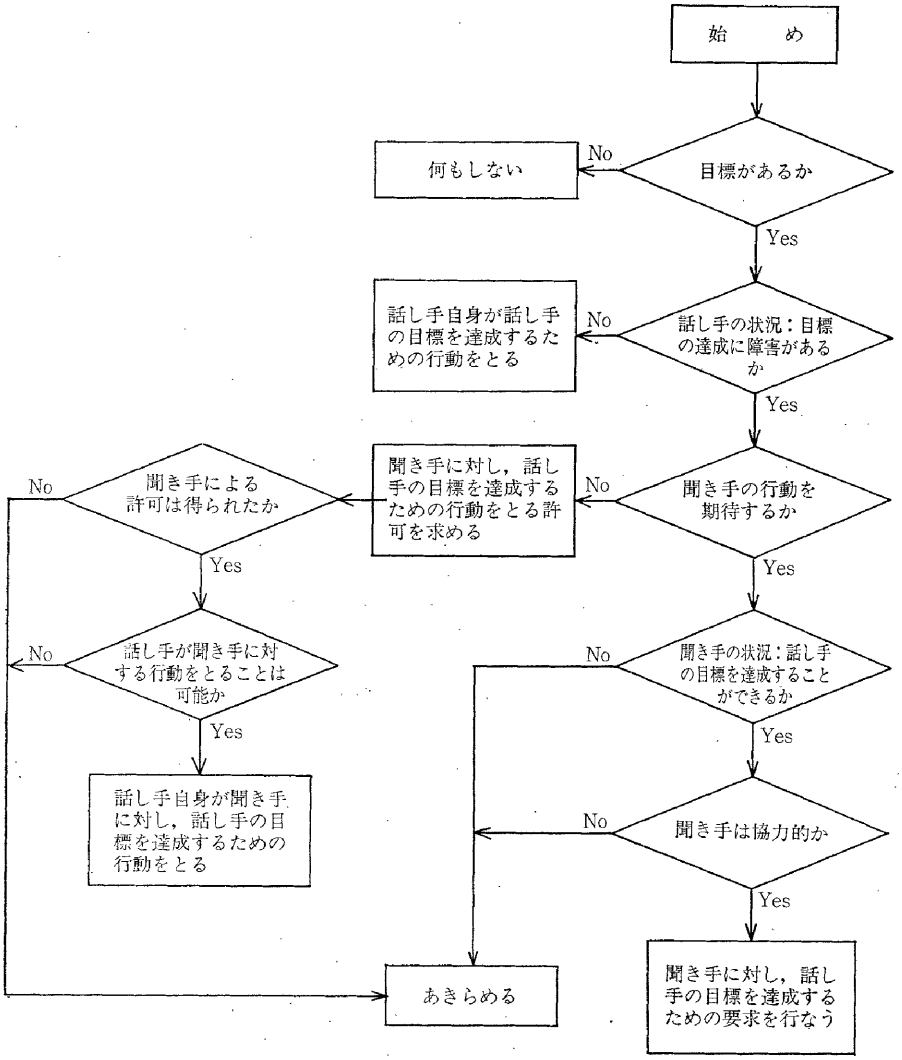

FIG. 1　要求を行うための情報処理の流れ

手続　調査票（AないしB）を配布し，約1週間後に回収する。被験者の課題は，各状況の主人公になったつもりで「要求」を表現することである（例：「ソース取ってもらえますか」）。各状況につき少なくとも3通り以上，できれば5通り書くように教示する。

結果と考察

全体で2088の要求文が得られた。

これらの要求文を，述部で言及されている事柄（動詞の内容や助動詞の機能）から次のように分類した。但しWH疑問文（例：「今，何時ですか」）や慣習的なあいさつ（例；「ごめん」，「どうも」，「お願い」）は，その他に含めた。

1. 話し手の目標（例；小銭がほしい）が，言及されているもの（例；「小銭がほしいのだけど」）。
2. 話し手の状況（例；小銭がない）が言及されているもの（例；「小銭がないの」）。
3. 聞き手の状況（例；小銭を持っている）が言及されているもの（例；「小銭，持ってますか」）。
4. 話し手に対する聞き手の行動（例；小銭を貸す）が言及されているもの。
   ①聞き手の行動を期待しているもの（例；「小銭，貸してほしいのだけど」）。
   ②聞き手の協力を尋ねているもの（例；「小銭，貸してくれますか／貸してもらえますか」）。
   ③直接的要求（例；「小銭を貸して下さい」）。
5. 聞き手に対する話し手の行動（例；小銭を借りる）が言及されているもの。
   ①話し手の行動の許可を尋ねているもの（例；「小銭，借りてもいいですか」）。
   ②話し手の行動の可能性を尋ねているもの（例；」小銭，借りれますか」）。
   ③話し手の行動の直接的宣言（例；「小銭，お借りしますよ」）。
6. その他。

Searle (1975) によれば，間接的要求は，要求が成立する前提に言及することによってなされる。この枠組によるならば本調査の結果から，間接的要求における前提を次のように推測することができよう。

(1) 話し手には目標がある（話し手の目標；以下，目標と略す）。

(2) 話し手の目標の達成を妨げる障害がある（話し手の状況；話し手状況と略す）。

聞き手に何らかの行動をとってもらうことに重きを置くものとして，

(3) 聞き手は，話し手の目標を達成させ得る状況にある（聞き手の状況；聞き手状況と略す）。

(4) 話し手は，目標を達成するために聞き手の行動を望む（聞き手の行動の期待）。

(5) 聞き手は，話し手の目標を達成するための行動をとることに関して協力的である（聞き手の協力；協力と略す）。

話し手自身の行動の遂行に重きを置くものとして，

(6) 話し手の行動が聞き手により許可されている（許可）。

(7) 話し手による行動が可能である（可能性）。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Cohen and Perrault (1979) は，Searle の条件から，要求を行う際になされる情報処理の流れを示唆している。本調査で得られた条件は，より大きな流れ図，FIG. 1 のように整理できよう。

以上，得られた条件に関する明示的な情報が，間接的要求の理解に重要と考えられる文脈的情報である。本研究では，要求が生じるための基本的条件と考えられる話し手の目標と状況，および聞き手に何らかの行動をとってもらうことに重きを置く条件から聞き手の状況と協力を取り上げ，それらが間接的要求の理解にどのように役立つかを調べる。話し手による聞き手の行動の期待は，話し手の目標に含まれる場合もあるので，独立には取り上げない。また話し手自身の行動の遂行は，他者に対する要求とは区別して扱う方がよいと考えるので，これに関する条件もここでは取り上げない。

実 験 1

ここでは話し手の目標，話し手の状況，聞き手の状況，聞き手の協力に関する明示的な情報（文脈的情報）が，慣習的，および非慣習的な間接的要求の発語内の力の理解に及ぼす効果を見る。

但し慣習的な間接的要求は，「・・・してくれますか」や「・・・してもらえますか」等，一般に用いられることが多い形式のもので，特定の文脈がなくても要求として受けとられる率が高い。また非慣習的な間接的要求は，「・・・ありますか」や「・・・もってますか」等，一般に用いられることが比較的少ないもので，特定の文脈がない場合，質問と受けとられる率が高い*。Gibbs (1980) によっても示唆されるように，文脈的情報の効果は後者においてより大であると考えられる。

方法

被験者 大学生48人。

材料 24の要求主題（「話し手が聞き手に○○を頼む／尋ねる」という形で表わされる，要求の主旨。付録参照）の各々につき，文脈文（目標，話し手状況，聞き手状況，協力に関する情報），会話文（慣習的な間接的要求文と非慣習的な間接的要求文），および判断文（「・・・して下さい」の形で表わされる直接的要求文）を作成する。協力に関する情報は，「聞き手が話し手に・・・してくれる。」という表現（協力1）と「話し手が聞き手に・・・してもらえる。」という表現（協力2）の2通りを作成した。例を示す。

〈文脈文〉 目標：時間を知りたい。／話し手状況：時計が止まっている。／聞き手状況：(聞き手は)時計をもっている。／協力1：(聞き手は話し手に)時間を教えてくれる。／協力2：(話し手は聞き手から)時間を教えてもらえる。

〈会話文〉 慣習的：時間を教えてくれますか。／非慣習的：時計をもってますか。

〈判断文〉 時間を教えて下さい。

さらにフィラー用の材料として16組の文脈文，会話文，判断文（それぞれ1文ずつ）を作成した。これらの文の要求主題は必ずしも一貫していない。例を示す。

〈文脈文〉 猫が見あたらない。

〈会話文〉 猫を連れて来てもらえますか。

〈判断文〉 猫を連れて来ないで下さい。

装置 実験の制御はすべてアップルコンピューター社製アップルⅡおよびアップルディスクⅡにより行う。材料はCRTで呈示する。被験者の反応はアップル本体のキーボードから入力され，ディスケット上に記録される。

実験プログラムはベーシックで，また呈示用ひらがな文字と反応時間測定用タイマーは機械語で，筆者が作成した。文字は1cm四方の枠に入るものである。タイマーは1.4ミリ秒を一単位とするものである。

手続 個人実験である。被験者は教示文を読み，練習問題を行った後，本課題を行う。

被験者がCRT上の表示"PUSH YES-KEY TO START"に従い"YESキー"(／)を押すと課題が始まる。

(1)"QUESTION-(課題番号)"が0.5秒呈示された後，文脈文（目標，話し手状況，聞き手状況，協力1，協力2のいずれか）が現われる。但しコントロール条件では，文脈文の代わりに「・・・・」（文脈文と同程度の長さのドット）が現われる。

(2)被験者がこれを読み終え"YESキー"を押すと，文脈文または「・・・・」は消え，会話文（慣習的または非慣習的）が現われる。

(3)被験者がこれを読み終え"YESキー"を押すと，会話文は消え，"YES OR NO"が表示された後，判断文が現われる。被験者の課題は，会話文と判断文の意図が同じか否か——会話文の意図が「要求」であるか否か——を判断することである。「同じ」と判断した場合には"YESキー"(／)，「異なる」と判断した場合には"NOキー"(Z)を押す。

押されたキーの種類と判断に要した反応時間が記録さ

* 40人の被験者に，慣習的と考えられる間接的要求文（各被験者につき10文）について，文脈なしで要求か質問かを判断させた。その結果，反応の72%が「要求」であった。また非慣習的と考えられる間接的要求文（各被験者につき15文）について同様の判断をさせたところ，反応の96%が「質問」であった。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

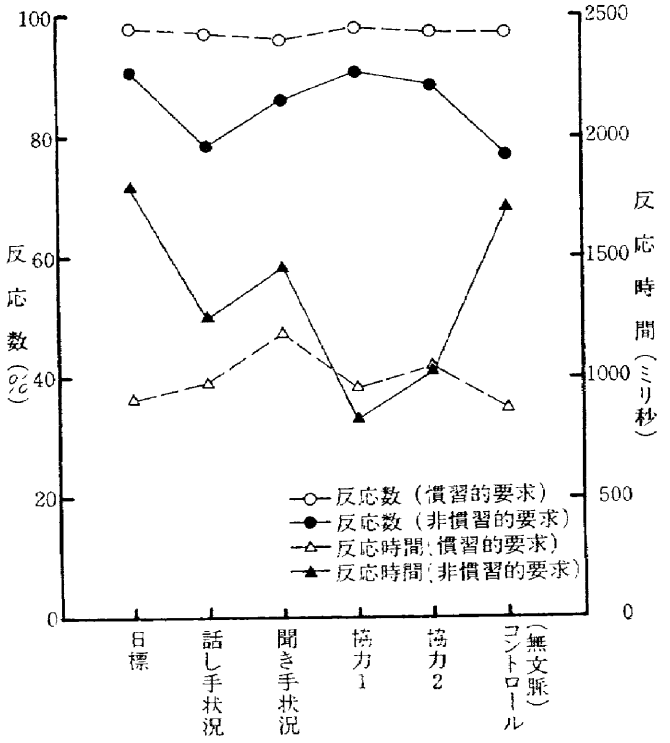

FIG. 2　実験1の結果

れる。課題はターゲットとなる課題24題，フィラーとなる課題16題，計40題である。文脈文一種類あたり192回（4題×48人）の観測がなされることになる。

教示の要旨は以下の通りである。

「まずAさんが頭の中で考えたこと（文脈文）が出ます。次にAさんがBさんに対して言ったこと（会話文）が出ます。最後に判断文が出ます。あなたの課題は，会話文と判断文の意図が同じか違うかを判断することです。」

5種類の文脈文および「・・・・」が出る回数は，被験者間，課題間でカウンターバランスされている。また課題の呈示順序はランダムである。

所要時間は練習も含め約20分である。

結　果

各文脈文およびコントロール（「・・・・」）について，YES反応の生起率と，YES反応における反応時間（対数変換したもの）を分析する。結果をFIG. 2に示す。

YES反応の生起率について比の検定を行ったところ，慣習的な要求文と非慣習的な要求文とでは，前者の方が生起率が有意に高かった（$z=7.6$, $p<.001$）。文脈文条件（コントロールも含める）間の差は慣習的な要求文では見られなかったが，非慣習的な要求文では，コントロールに比べ目標，協力1，協力2で生起率が有意に高く（$z\geqq 2.3$, $p<.02$），聞き手状況で高い傾向がある（$z=1.68$, $.10<p<.05$）。また目標，協力1，協力2の生起率は，話し手状況よりも有意に高い（$z\geqq 1.99$, $p<.05$）。

反応時間について慣習性(2)×文脈文(6)の2要因分散分析を行ったところ，慣習性，文脈文，交互作用に有意差が見られた（慣習性は，$F(1/1048)=6.39$, $p<.05$；文脈文は，$F(5/1048)=3.32$, $p<.01$；交互作用は，$F(5/1048)=2.81$, $p<.05$）。Newman-Keuls法による対間比較の結果，慣習的な要求文では文脈文の条件間の差はなかったが，非慣習的な要求文では協力1，協力2の方が目標とコントロールより反応時間が有意に短かった（$Q(1048)>=\geqq 4.29$, $p<.05$）。また，協力1の方が聞き手状況より有意に短かった（$Q(1048)=4.52$, $p<.01$）。

考　察

本実験では，目標，話し手状況，聞き手状況，協力1，協力2に関する明示的な情報が，慣習的，非慣習的な間接的要求の，発語内の力の理解に及ぼす影響を調べた。結果から次の事が示唆される。

まず慣習的な間接的要求と非慣習的な間接的要求について，脚注で述べた予備実験のデータも合わせて考えるならば，慣習的な方は文脈がなくても要求として受け取られやすいので，文脈の効果は現われない（天井効果）。しかし非慣習的な方は質問として用いられるのが一般的なので，要求として受け取られるためには文脈が重要な働きをすると推測される。このような現象は，状況説明文の効果に関してGibbs（1980）でも報告されている。また仲ら（1982）でも，「すみませんが」等のマーカー（発語内の力の理解を促す）について，同様の事が見出されている。非慣習的な要求文の方が，発語内の力の理解に効果をもつ情報に敏感であると言えよう。

次に，各文脈的情報が発語内の力の理解に及ぼす影響について考察する。YES反応の結果から，目標，協力1協力2に関する情報が与えられた時，間接的要求の意図が「・・・して下さい」の意図と等しい，と判断される率が高くなることが分かる。これらの情報は，間接的要求が「要求である」と理解されるために有効な文脈的情報であると言えよう。

但し，目標と協力1，協力2の効力は必ずしも同じではないことが，反応時間の結果から示唆される。目標に関する情報では，協力1，協力2よりも有意に長い時間がかかっている。間接的な表現から意図を推測するのに，前者はより多くの過程を要するのかもしれない。例えば，後者は判断文と同じ動詞を含んでいるため，その分処理が少なくてすむと考えられる。

目標に関する情報は，判断文と同じ動詞を含まないにも関わらず，（判断に要する時間はより長くかかるが）協力1，協力2に関する情報と同程度の効果をもつことは，注目すべきである。Clark(1979)が強調するように，

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

話し手の目標は間接的要求の理解において大きな手がかりになると考えられる。

実験 2

ここでは，間接的要求の「内容」――話し手が聞き手にしてほしいことは何か――の理解における文脈的情報の効果について見る。

方法

被験者 大学生20人。

材料 実験1で用いた24組の文脈文（目標，話し手状況，聞き手状況，協力1，協力2）。

装置 実験1に準ずる。

手続 個人実験である。被験者は教示文を読み，練習課題を行った後，本課題を行う。

被験者がCRT上の表示"PUSH GO-KEY TO START"に従い"GOキー"(／)を押すと課題が始まる。

(1)"QUESION-(課題番号)"が0.5秒呈示された後，各要求主題にそって一連の文脈文（目的，話し手状況，聞き手状況，協力1，協力2）が次々に現われる。呈示のスピードは，実験1同様，被験者によって制御される。すなわち被験者がある文脈文を読み終え"GOキー"を押すと，その文脈文は消え，次の文脈文が呈示される。各要求主題における文脈文の呈示順序は被験者間，課題間でカウンターバランスしてあり，被験者からは，文脈文の呈示順序はランダムであるように見える。

(2)文脈文を読み進めてゆくうちに，文脈文から示唆される要求の内容が分かったら，被験者はその時点で"ANSWERキー"(Z)を押す。CRTに"ANSWER"の表示が出るので，被験者はその内容を「・・・して下さい」という形式で口頭で答える。"ANSWERキー"を押さずに最後の文脈文まで進むと，最後の文脈文を読み終えた後，自動的に"ANSWER"の表示が出る。

"ANSWERキー"が押された時に呈示されていた文脈文，およびその文脈文が現われてから"ANSWERキー"が押されるまでの反応時間が記録される。また被験者の回答は実験者が筆記する。

(3)文脈文が残っている場合には，被験者は再び"GOキー"にもどり，最後の文脈文まで読み進める。読み進めるうちに答えが変わったら，再度"ANSWERキー"を押し，前の答えを修正することができる。修正された回答も実験者が筆記する。

課題は24題である。文脈文は一種類あたり480回(24人×20題）呈示されることになる。課題の呈示順序はランダムである。

教示の要旨は以下の通りである。

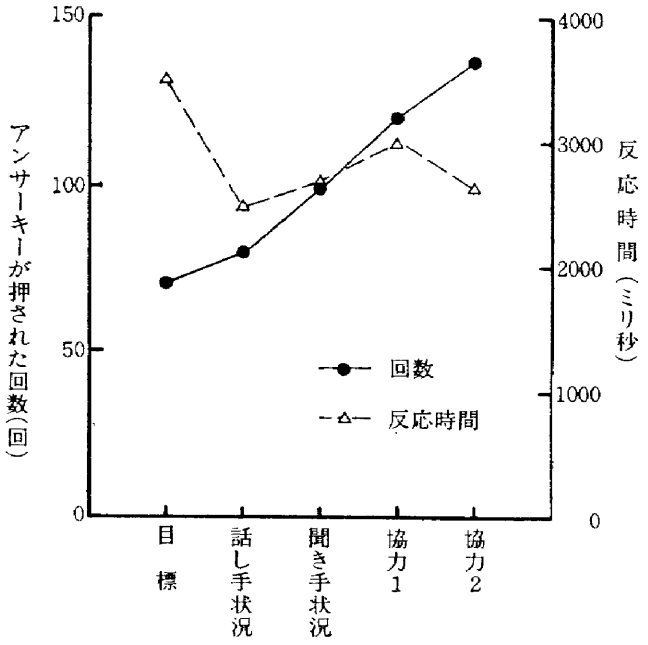

FIG. 3 実験2の結果

「画面に5つの文がひとつずつ出てきます。これらの文はAさんが相手の人に何かを頼もうとして考えたことです。このようなことを考えた結果，Aさんは何と頼んだでしょうか。分かった時点で，『・・・して下さい』という形で答えて下さい。」

所要時間は練習も含め約20分である。

結果

5種類の文脈文のそれぞれについて，"ANSWERキー"が押された――「要求の内容が分かった」とされた――回数と，その文脈文が呈示されてから"ANSWERキー"が押されるまでの反応時間を得た（誤答はなく，また根本的な修正もなかったので，すべて1度目に"ANSWERキー"が押された反応について集計した)。結果をFIG. 3に示す。

"ANSWERキー"が押された回数の割合（各文脈文条件で"ANSWERキー"が押された回数／各文脈文が呈示された回数）について比の検定を行ったところ，目標は聞き手状況，協力1，協力2より有意に少なく（$z \geqq 2.55$, $p < .02$)，話し手状況は協力1，協力2より有意に少なく（$z \geqq 3.33$, $p < .001$)，また聞き手状況は協力2よりも有意に少なかった（$z = 2.78$, $p < .01$)。

"ANSWERキー"が押されるまでの反応時間（対数変換したもの）について文脈文条件の一要因分散分析を行ったところ，有意な差が見出された（$F(4/502) = 3.11$, $p < .05$)。Neuman-Keuls法により対間比較を行ったところ，目標は話し手状況，聞き手状況，協力1，協力2よりも反応時間が有意に長かった（$Q(95) \geqq 3.37$, $p < .05$)。それ以外の差は有意ではない。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

考　察

本実験では，目標，話し手状況，聞き手状況，協力1，協力2に関する明示的な情報が間接的要求の内容の理解に及ぼす影響を調べた。結果から，目標は効果が最も小さく，話し手状況，聞き手状況，協力1，協力2の順で効果が大きくなっていることが示唆される。

協力1と協力2では聞き手に期待される行動が動詞として含まれているから，効果が大きいのは，あるいは当然のことかもしれない。しかし目標，話し手状況，聞き手状況の間にキー押しないし反応時間の差があることは，必ずしも自明なことではない。FIG. 1のような処理の流れ図の上で考えるならば，直接的な要求表現への距離が近い条件ほど，内容の同定に効果的であると解釈できよう。

全体の考察

本研究では，間接的要求の理解において重要と考えられる文脈的情報を推定し(予備調査)，それらが間接的要求の理解――発語内の力の理解(実験1)と要求内容の理解(実験2)――にどのような影響を及ぼすかを調べた。

まず予備調査では，Searle (1975) の枠組を発展させ，要求において言及されることの多い事柄から間接的要求が成立するための前提を推測した。それらの前提に関する明示的な情報が，重要と考えられる文脈的情報である。

その結果，話し手の目標，話し手の状況，聞き手に何らかの行動をとってもらうことに重きを置くものとして，聞き手の行動の期待，聞き手の状況，聞き手の協力が推定された。また話し手自身の行動の遂行に重きを置くものとして，話し手の行動の許可，話し手の行動の可能性が推定された。会話における文脈的情報は無限にあるかもしれないが，間接的要求を理解する上で特に重要なものとして一般化できそうなものは，それほど多くはないようである。これらの文脈的情報は，話し手の目標から直接的な要求表現に至るまでの情報処理の流れ (FIG. 1) の中に，位置づけて示すことが可能である。

実験1と2で，話し手の目標，話し手の状況，聞き手に何らかの行動をとってもらうことに重きを置くもののうち，聞き手の状況，聞き手の協力，に関する明示的な情報について，それらが間接的要求の理解に及ぼす影響を調べた。

その結果，要求の発語内の力を同定するのには，話し手の目標と聞き手の協力に関する情報が効果的であること，また，文脈的情報から要求の内容を推測するのには，目標，話し手の状況，聞き手の状況，聞き手の協力の順で効果が大きくなることが見出された。

FIG. 1で示したような流れを仮定するならば，発語内の力の理解には，要求行動の最も根底にあると思われる話し手の目標が，また要求の内容の理解には，直接的な表現により近い情報が，それぞれ関わっていると考えられる。このことは，間接的要求の理解には様々な要因が平行的に関っているとするClark (1979) や仲ら (1982) の報告を支持し，また，間接的要求の2つの側面（発語内の力と内容）の理解が，異なる心理的過程によっていることを示唆するものである。以上，本研究により，間接的要求の理解において重要と考えられる文脈的情報が同定され，その働きに関する知見が得られた。

間接的要求には字義的な意味と間接的な意味の，2通りの意味がある。字義的な意味が文脈にそぐわない場合に間接的な意味が推測されるのだろうか (Clark & Lucy, 1975 ; Gordon & Lakoff, 1975)，それとも間接的要求は多義的であり，文脈によってそのどちらかの意味が決定されるのだろうか (Gatzdar, 1978 ; Gibbs, 1980)。

おそらくその両方の場合があるのであろう。非常に間接度の高い非慣習的な間接的要求の場合は，いかなる文脈でも字義的な意味から出発すると考えられる。しかし明確な文脈に埋めこまれた一般の会話では，純粋に字義的な意味から出発することはほとんどなく，むしろ，相手の意図を読みとり発話の意味を期待するといったトップダウン的な処理が行われるように思われる。しかしいずれにせよ，間接的要求の最終的な意味はその発話がなされる文脈に依拠しているという点については，議論の余地はないだろう。

間接的言語行為の意味は，その発話がなされる文脈を考慮しない限り言語学的にも心理学的にも明らかにすることはできない。今後は他の間接的言語行為についても，どのような文脈的情報*がある場合にどの意味が付与されるのかを調べてゆくことが必要であろう。

引　用　文　献

Brown, R. 1980 The maintenance of conversation. In D. R. Olson (Ed.), *The Social Foundations of Language and Thought.* New York : Norton & Company. Pp. 187-210.

* 本研究では文脈的情報を言語的に表わしたが，これらの文脈的情報は，必ずしも言語によって伝えられねばならないわけではない。「時計を忘れた」という話し手の状況は，時計を探すという動作によって表わされ得る。また「時間を教えてくれる」という聞き手の協力は，その人の友好的な笑顔によって表わされ得るだろう。重要なのは手段ではなく情報内容である。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Clark, H. H. 1979 Responding to indirect speech acts. *Cognitive Psychology*, **11**, 430–477.

Clark, H. H. & Lucy, P. 1975 Understanding what is meant from what is said : A study in conversationally conveyed requests. *Journal of Verbal Learning & Verbal Behavior*. **14**, 56–72.

Cohen, P. R. & Perrault, C. R. 1979 Elements of a plan-based theory of speech acts. *Cognitive Science*, 3, 177–212.

Gazdar, G. 1981 Speech act assignment. In A. K. Joshi, B. L. Webber, & I. A. Sag (Eds.), *Elements of Discourse Understanding*. Cambridge : Cambridge University Press. Pp. 64–83.

Gibbs, R. J., Jr. 1981 Your wish is my command : Convention and context in interpreting indirect requests. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **20**, 431–444.

Gordon, D. & Lakoff, G. 1975 Conversational postulates. In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), *Syntax and Semantics*. vol. 3. *Speech Acts*. New York : Academic Press. Pp. 83–106.

Levinson, S. C. 1981 Some pre-observations on the modelling of dialogue. *Discourse Processes*, **4**, 93–116.

仲真紀子・無藤隆・藤谷玲子 1982 間接的要求の理解に関わる要因 教育心理学研究 **30**, 175–184.

Searle, J. R. 1975 Indirect speech acts. In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), *Syntax and Semantics*. Vol. 3. *Speech Acts*. New York : Academic Press. Pp. 64–83.

付録 実験1，2で用いた要求主題

1 友人に時間を尋ねる。
2 友人に小銭を貸してくれるよう頼む。
3 友人に（第三者の）電話番号を尋ねる。
4 弟に塩をとってくれるよう頼む。
5 駅員に販売機から釣銭を出してくれるよう頼む。
6 兄に棚の上の箱をとってくれるよう頼む。
7 図書館員に本を借りる手続を尋ねる。
8 友人にレポートの提出を頼む。
9 弟に新聞を見せてくれるよう頼む。
10 母親に祖母の住所を尋ねる。
11 母親に洗濯を頼む。
12 兄に車で送ってくれるよう頼む。
13 友人に問題を説明してくれるよう頼む。
14 弟に本棚を動かしてくれるよう頼む。
15 友人に英語の試験の日を尋ねる。
16 妹に部屋の掃除を頼む。
17 妹たちに静かにしてくれるよう頼む。
18 電車内で，隣りの人に席を見ていてくれるよう頼む。
19 友人に泳ぎを教えてくれるよう頼む。
20 教室で，隣りの人に辞書を貸してくれるよう頼む。
21 友人に窓を開けてくれるよう頼む。
22 妹に伯母への贈りものを持って行ってくれるよう頼む。
23 金物屋の店員に太い針金を売ってくれるよう頼む。
24 弟にテレビを天気予報にしてくれるよう頼む。

〈付記〉
本稿をまとめるにあたりお茶の水女子大学内田伸子助教授より適切な助言をいただきました。記して感謝いたします。

(1983年4月15日 受稿)

ABSTRACT

THE EFFECTS OF CONTEXTUAL INFORMATION ON UNDERSTANDING INDIRECT REQUESTS

by
Makiko Naka, Takashi Muto

To understand an indirect request (e.g. "I want to know the time." to ask for the time), the context is very important. The purpose of this study was to investigate how important contextual information was, and to see how it affected understanding indirect requests.

First, in order to identify the important contextual information, we asked subjects through a questionaire to make indirect requests in various circumstances. what being reffered to frequently in the

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

indirect requests (e.g. speaker's goal : "I want to know the time.") suggested the premise for felicitous requests. We considered the information about such premise (e.g. A speaker wants to know the time.) as being the important contextual information.

From the results of the questionaire : speaker(S)'s goal, S's condition (unable to achieve the goal), S's expectancy for hearer(H)'s help, H's condition (able to achieve the goal for S), H's attitude (cooperative) were considered to be the premise for (S) requesting H to do some action.

Then, the effects of contextual information (information about S's goal, S's condition, H's condition, H's attitude) on understanding the illocutionary force (Exp. 1) and the content (Exp. 2) of indirect requests were investigated.

In Exp. 1, a contextual information, an indirect representation of a request, then a direct representation of the request were presented on CRT consequently. The subjects' task was to decide if the illocutionary force of the indirect representation was the same as that of the direct one, considering the contextual information. The response and response time were recorded. In Exp. 2, several contextual informations for a request were consequently presented on CRT. The subjects' task was to suspect the content of the request, taking the information into account one by one. The subjects pressed the key and answered as soon as they confirmed their suspect. The response and response time were recorded.

The results showed that to understand the illocutionary force, the information about S's goal and H's attitude were effective ; also to understand the content of requests, the information about S's goal had little effect, the information about S's condition and H's condition had a greater effect, while information about H's attitude had the greatest effect.

NII-Electronic Library Service